

全国英語教育研究大会（愛媛大会）に参加して

徳島県立那賀高等学校 大和 裕典



1 はじめに

令和5年11月24日と25日の2日間、松山市民会館と愛媛大学にて第73回全国英語教育研究大会（愛媛大会）が開催された。初日は文教大学大学院の金森強先生による講演と松山市立福音小学校、砥部町立砥部中学校、愛媛県立松山北高等学校の先生方の映像による授業実演、2日目は分科会が行われた。

私は今年で採用6年目になり、初任校での勤務を終え、2校目での勤務も3年目を迎えた。私事としては、今年度は第一子を授かったことで子育てに従事したいとの思いから、年度当初の4月、5月に育児休暇を取得し、2ヶ月間ではあったが学校から完全に遠ざかることとなった。元々英語は好きなので、その間も英語の勉強を欠かさないようにしようと考えていたが、思っていた以上に育児は大変であり、思うように英語に触れられないまま2ヶ月が過ぎていった。6月に復帰後は1年生の担任を任せ、今日まで日々生徒の英語力のみならず、人間力向上のために奮闘している。そんな中、どうしても見つけられずにいるのが、どうすれば生徒の英語力を向上できるのか？どうすれば生徒が主体性を持って英語学習に向かえるのか？ということである。ICTを使うことを強く勧められる昨今ではあるが、それを嘲笑うかのように生徒の使うタブレットの不具合のニュースは日々加速しており、何をどうしたら良いのかとの悩みは尽きない。そう考えているときに今回の大会の存在を知り、先に書いたような疑問を解決する方法は何かあるのかという強い疑念から解き放たれたいという思いから、今回の大会に参加させてもらうことにした。

2 英語教育としての言語教育

金森先生の話す内容は非常に面白く、時間が過ぎるのがあっという間であったように感じた。その中でも特に印象的だった話が、日々私が目を背けてきたもので「AIについて」だった。「ChatGPTに生成AI、これからの時代はこれらはあって当たり前のツールになる。翻訳だって発音だって何だって、

このツールを活かせばできないことはないぐらいの時代になる。しかし、だからといって、英語教育を本当にAIに任せてしまって良いのか？」私はそれを聞いた時にはっとさせられた。なぜなら、自分自身の認識としては、生成AIというものは、生徒が作文を書かせたり、思考をしたりしなくて楽にすんでしまうものであるというぐらいの認識しかなかったからである。そして、何より生徒の英語力向上の気持ちを阻害してしまうものであると考えていた。しかし、先生の話を書く中で、むしろ有効に活用することができるものなのではないかという認識が変わっていった。この日を境にまずは自分で始めてみたことがある。それは自分のライティングトレーニングである。

日常会話で使うアウトプット表現なら頭の中に出てきて、自分の中で言語化できるのだが、それをアカデミックな表現にしようとするとなると自分の中では非常にハードルが高かった。お金を払ってまで何かの通信教育を受けても意味があるような気もしないので、そこは一切向き合っていかなかった。しかし、ChatGPTを使うことによって、私のライティング能力を高められるのではないかと考え、海外国内問わず、毎日のニュースの中で自分自身が気になったものに関して自分の意見を英語で書いて、その後その文をChatGPTに添削してもらい、アカデミックな文章に変換してもらい、それをまた改めて自分で書いてみるという方法だ。やっている中で面白くなってきて、時間を忘れることさえあるほどだ。私が書いた文と添削された文の一例をここで挙げてみたい。

Of course, it is OK to smoke vape, but that looks not so good actually. I wonder what will be changed suddenly by the power.

ニュージーランドでは2009年以降に生まれた人の喫煙を禁止し、将来的には喫煙を一切させないという法律を打ち出していたが、その方針を変更するとなった際に私が書いたこの文が、添削後は以下のようなになる。

While vaping is acceptable, its prevalence among the underage population raises concerns. It remains uncertain how the dynamics of this situation might suddenly change under the influence of authority.

書いてみて思うが、理解はできても自分でこのような文を書くことはまずできない。しかし、これを続けていけば間違いなく自分の力になっていくと感じている。このような使い方こそ、AIに使われるのではなく、AIを使っていると言えるのではないだろうか。教員としては生徒がこのような使い方をするように持っていくべきなのではないかと思う。おかげで今は英語教育の中のAIをかなりポジティブに捉えるようになった。そのため私は自分の生徒にはChatGPTはもちろんのこと、翻訳アプリやエラー発見アプリやサイトを上手に活用するように伝えている。使っていく中で、おそらく問題も出てくるかもしれないが、生徒たちは英語教育に対して少し前向きになってきたのではないかと感じている。

金森先生のお話の中でもう一点気になったのが、「即興性の勘違い」である。スピーキング指導においては、問われた質問に対して、流暢性と共になるべくすぐに返答できた方が良しとされるケースが多いように思う。私自身も当然そうであると考えていた。しかし、先生の話を書いてはっとさせられた。

「では、すぐに返せたらその人が実際にはそう考えていない内容でも良いのですか？」

確かに、それは違う気がする。例えば英検の2次試験の練習の中では、こちらの質問に対してなん

と発言して良いか分からず、長い時間沈黙してしまう生徒も少なくない。そうなるこちらとしては何だかもどかしい気がしてしまい、何でも良いから返せたら良いのにと思いがちになってしまう。質問項目の中には、そもそも今まで考えたことさえなかったことを聞かれ、その場しのぎのとりあえずの答えを言うことが多々ある。ここでは明らかに、「英語を話せること」と「自分の意思を伝えられること」は異なっていることになる。ただ、当然ながら普通は合格したいと考えるもの。とりあえずは「英語を話す」しかないのである。

よく考えてみて気がついたのだが、はっとさせられただけではなく、私自身の指導の中で先生が話す内容と近いこともある。それは例えば、“What do you usually have for breakfast?” という質問に対してとりあえず、“I had rice and miso soup.” と答えるのは違うぞ、であったり、何かに対してどちらの方が好きか? という答えに対して、好きではないが、そちらの方が答えやすいのでそう言いました、ということに対しては、極力やめるようにと繰り返し伝えているつもりだ。英語教育は言語教育であるという認識の元、この指導は続けていきたいと考えている。

3 AI・アプリ・データ

2日目には分科会に参加させてもらったが、特に印象的だったのはどの発表者の先生方も ICT を本当に上手に活用されているということである。先生方のお話を聞いていると、前述したように最近は ChatGPT のような AI の活用を英語教育の中でも行っていくべきであることに加え、様々なアプリを活用していくことは生徒の英語力のみならずそもそも主体性を向上することができるということを感じさせられた。最近の県内の状況からするとタブレットを通した指導が思うようにできない状況にあり、今ではそれは本当に大きな危機であると感じている。スピーキング指導においては、Terra Talk というものがあり、いつでも AI と英会話ができるようになっているようだ。また、話した内容に関して添削や指導も行ってくれるため、そのアプリ内で話すことがモチベーションとなって、生徒たちは非常に前向きに英語学習に向かっているようであった。また Quillbot というオンラインサイト上では、翻訳はもちろんのこと、文法や語彙のエラーチェックやパラフレーズなんかもできてしまう。これまでのスピーキングやライティング指導では、教員が一人一人をチェックしなければならず、そこに膨大な時間がかかってしまうと悩んでいたことが一気に解決しているのである。ただ、場合によってはそれらのツールを通して学んだこと自体にエラーがあり、生徒に任せるだけではそもそもそれに気づかないまま学んでしまう可能性もある。しかし、そんなことを気にするよりも行動を起こしてどんどんアウトプットさせるべきなのではないのだろうか。そうする中で自然と自分の英語に対して自信がついて前向きになれると考える。

また、データをとっておくことが重要であることを学んだ。生徒にアウトプットさせる中でそれを例えば文字として膨大な量で保存しておく。スピーキングにおいてはこれはまだまだ難しいことかもしれないが、ライティングにおいては ICT を使えば容易に行うことができるだろう。その保存した内容を今後の指導に役立てていくことが可能だ。その一つとして、ChatGPT に打ち込み、その中で特に多く見られるエラーチェックをしてもらえば、感覚ではなく、実際に起きている生徒たちの共通したミスに気づくことができ、次からの指導においてはそのミスを事前に指導することなんかもできてしまうのである。

4 おわりに

ここまでいろいろなことを書かせていただいたが、英語教育というのは日々進化が止まらないことが、私の中では非常に面白いと感じている。何をすることも、ICT というのはなくてはならない存在になっている。私のこれまでの指導においては、生徒に振り返りをさせるということが抜けていたように感じている。それは時間に追われる中で、次の単元に行かなければならない、であったり、振り返りのためのワークシートを作る時間を確保できていなかったりしたためである。しかし、今では自分の課題も ICT を使えば簡単に改善できると思えるようになった。振り返りに加え、そもそも英語が好きか？単元を通してどのような力をつけられるようになりたいか？どんなところを教えて欲しいか？などのような質問に対して、どの生徒も平等に答える機会を確保した上で指導をしていきたいと考えている。生徒の英語力が少しでも向上するために、そして自らの英語力や指導力を向上させるためにもこのような大会や研修に今後も参加していきたい。